

私のベトナム紀行

香川史朗

遠い異国の地で聞き覚えのある言葉が聞こえてきた。ここは「The War Remnant Museum」、通称「戦争犯罪展示館」。そこには、ギロチンの前で深々と手を合わせる数人の日本人の姿があった。第二次大戦中、この地で数々の悪業を働いたのであろう。展示館の中に入ると、目を覆いたくなるような残酷な写真や枯葉剤による奇形児のホルマリン漬け等の展示物が物凄い力を持って訴えかけてくる。その中で一際目に付く写真があった。日本人報道写真家、石川文洋の撮ったベトナム戦争時の写真だ。私はもともと彼の「報道カメラマン」という本を読んでベトナム戦争に興味を持つようになっただけに、書物の中のものと同じ写真が全身サイズの大きさに、しかもベトナムで展示されているのを見てひどく感動した。アメリカ軍将校が爆死した人民解放軍の死体を持ち上げているシーンなのだが、その将校の冷たい視線を見たら当時のアメリカ軍のベトナム人に対する心の持ち方が良く分かる。戦争は、本当に恐ろしいものであると強く訴えかける優れた写真だと思う。その他にも「ソンミ村大虐殺」や「北爆」の写真などが展示されていて、どれも惨たらしいものばかりであるが、すべてが、戦争の愚かさを知らしめる良い作品ばかりであった。

ベトナム戦争終結から約20年経った今では殆どその面影を見ることが出来ない。人々は明るく、エネルギーに満ち溢れ社会主義国の規制はどこにも感じられない。しかし、考えてみるとそれが当たり前なのかもしれない。今まで規制ばかり受けていた生活が一気に開放されたわけなのだから……。

今、ベトナムは物凄いスピードで発展している。町のあちらこちらに造りかけのビルが見られ、外国製品が氾濫し、人々はお洒落に着飾って町を颯爽と歩いている。戦争によって侵略、略奪され続けたベトナム人の心には深い傷痕が残っているはずだが、それにもまして開放された喜びが打ち勝って今日の発展に繋がっているように思える。

